

リンカーンの演説 (1863年11月19日)と 日本国憲法

2013年11月 19日
NHKラジオ

日本の江戸末期、明治維新(1868年)がおきる5年前の1863年11月19日に、米国大統領リンカーンは南北戦争の最中、ペンシルバニア州のゲティスバーグの戦いにおける戦没者のための国立墓地献納式典において、北部出身のリンカーン大統領が行ったのが、ゲティスバーグ演説として知られる有名な演説である。

「人民の、人民による、人民のための政治」
(...government of the people, by the people, for the people...)

欧州の帝国主義がアジアに侵略を繰り返し、植民地化をはかっていた時代、米国では国内を二分する南北戦争(1816-1865)が行われていた。



奴隷制存続を主張するアメリカ南部諸州のうち11州が合衆国を脱退、アメリカ連合国を結成し、合衆国にとどまった北部23州との間で戦争となった。結果、北部が勝利を収める。

北軍156万人、南軍90万人の兵力が激突、両軍合わせて62万人が亡くなっているという。

南北戦争については次のような対立軸が考えられる。
工業経済の北部 vs. 農業経済の南部
奴隷制を否定する北部 vs. 奴隷制を肯定する南部
保護貿易を求める北部 vs. 自由貿易を求める南部



このように、南北は体制や経済構造において別の国とも言えるほどに違う状況にあった。この対立軸は、19世紀におけるイギリスを中心とした世界経済体制形成の過程で起きた一連の政変・戦争の一環である。この戦争の直前には日本へ黒船を派遣しており、欧州から始まった産業革命の波は東西から東アジアに達していた。

農業国としてイギリスから独立して100年が経ち、工業経済化を進める北部と、原料供給地としての農業経済を継続したい南部が、一国としてまとまるのが難しくなったために戦争が起きた。

工業経済だった北軍は、その力を駆使して「鉄道」と「電報」のインフラを整備し、最新テクノロジーで、戦局を有利に進めた。

結果的に北部が勝利し、合衆国は国民国家として発展を続けることになる。終戦後にアラスカは買収され、北アメリカ大陸は世界的にも安定した情勢を保つことになり移民流入の増大も国力を伸張させた。列強の一つとなった合衆国は、欧州に対する相対的な国力増大を背景に、中南米や東アジアにおいて国際的な活動を展開することとなった。また、日本においてはこの戦争で使われた中古小銃類が大量に輸入され、戊辰戦争で兵器として使われている。

1946年、GHQ最高指令官として第二次世界大戦後の日本占領の指揮を執ったダグラス・マッカーサーは、GHQによる憲法草案前文に、このゲティスバーグ演説の有名な一節を織り込んだ。

Government is a sacred trust of the people, the authority for which is derived **from the people**, the powers of which are exercised by the representatives **of the people**, and the benefits of which are enjoyed **by the people**.
— GHQによる憲法草案前文。

この一文がそのまま和訳され、日本国憲法の前文の一部となった。

そもそも**国政**は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は**国民に由来**し、その権力は**国民の代表者がこれを行使**し、その福利は**国民がこれを享受**する。